

寺
ごよみ

七 月

一日 音沢お講 4

臨時総代会

八 日 清掃奉仕

一五日 永代祠堂会準備

永代祠堂会

一六日 中陣お講

仏教婦人会

一七日 寺族物故者法要

総代物故者法要

お初夜

一八日 戦没者追弔法要

一九日 ご満座

内陣法名法要

布教 福井千福寺住職

高務哲量師

一九日 連研 会所順昌寺

寺報 善 巧

発 行

〒938-0862 富 山 県
下新川郡宇奈月町浦山497
白雪山 善 巧 寺
TEL (0765) 65-0055
FAX (0765) 65-0975
メール zengyou@p2342.nsk.ne.jp

七月十六〜十九日

永代祠堂会

布教 高務 哲量 先生



大空へチューリップの散華

寺報「善巧」は、この二十四年間の善巧寺のさまざまな歴史を、全門信徒の方々に伝えてきました。

前々住職釈俊之は五十号に次の様に書いています。

「一般の新聞は、社会の

出来事を報道する役目をもっています。寺報

は、寺と門徒の間の連絡

簿であり、浄土真宗の文書伝道の一翼をな

すものであり、それと

共に、皆さんに悦んで

貰える寺からのプレゼント

ントでもあります。

『一月のたしなみはち

かきところ御開山様の

御座候ふところへまる

るべしとたしなめ』と、

蓮如上人御一代記聞書

にあるように、皆様は

事あるごとに善巧寺に

お参り下さるし、私達は寺

報「善巧」という新聞の形

となつて皆様のお宅へ参ら

せて頂いております。広告

やダイレクトメールが山の

ように届けられる現在、願

わくばお寺の新聞だけはこ

祝 寺報「善巧」100号

れらと一緒に取り扱いはしないで頂きたいのです。」

また、平成十年に厳修さ

れた蓮如上人五百回遠忌法

要のご親教でご門主様は次

のように述べられました。

「具体的なお願いを申し

ます。お寺からのお便り

を門信徒の方、お一人お

一人に届けていただきた

いということです。すで

に行つていらつしやるお

寺が少なくありませんが、

その大切さを門信徒の皆

様にも理解していただき、

ご協力をお願いしたいの

です。理想を言えば、す

べての方にお寺での法座

にお参りしていただくこ

とですが、現代日本の社

会を考えますと、それは

到底望めることではあり

ません。故郷を離れた方

の中には、自分のお寺や宗

派の名前も知らない方が増

えています。

お寺からのお便りこそ

『ご文章』ご製作の精神を

現代に生かすことではない

でしょうか。(抜粋)



空華忌講話

(平成十二年)

梯實円和上(一)

本願寺派勸学
行信教校教授



ああ、弘誓の強縁、多生にも値ひがたく、真実の淨信、億劫にも獲がたし。たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。もしまたこのたび疑網に覆蔽せられれば、かへってまた曠劫を経歴せん。誠なるかな、損取不捨の眞言、超世希有の正法、聞思して遲慮することなれ。

皆さん今晚は。ご当寺には、二度ほど参上させていただいたことがあるのですけれども、空華忌にあわせていただくのは今日が初めてでございます。この空華忌といえますのは、私が申すまでもなく皆さんよくご存じのように、空華派の学祖となられた明教院僧鑑師のお徳を偲ばせていただく法座でございます。この明教院僧鑑師という方が、浄土真宗の教学の発展に大きな寄与をしてくださったということは、皆さんもすでにご存じだと思います。実は、江戸時代の中期頃までは、どちらかというと、この真宗の教学は、天台宗だとか真言宗だとか禅宗だとかかというような聖道門に対して、浄土門の特徴というものをあらわしていこうということが主だったわけです。あ

るいは、この浄土門の中でも、鎮西浄土宗であるとか、あるいは時宗であるとかいうような浄土宗の異流に対して、浄土真宗の特色、親鸞聖人の教えの特色をあらわしていこうというふうな、どちらかというと対外的な形で教学というものが営まれておったわけでございます。が、この明教院僧鑑師のお師匠さまにあたります陳善院僧撰師という方がありまして、この僧撰師あたりから親鸞聖人の教えそのものを明確にしていこうというふうなことが問題になってきます。そしてこの明教院僧鑑師は、そういう意味で、浄土真宗、親鸞聖人の教えはどういうものであるかということ、親鸞聖人の教えに即してあらわしていこうとされた、そういう学風というものが始まっています。一番はじめの頃に

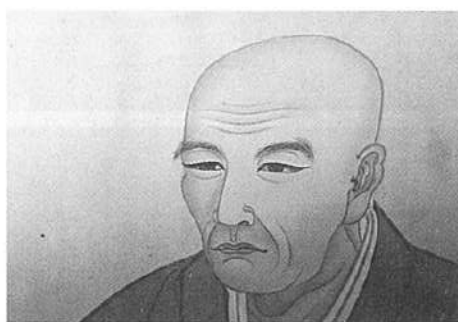


出身なんでしょうが、今日は時間ありませんのでまた明日でもいいろんな学僧たちのエピソードなどをお話したいと思えますけれども、この僧撰師は若くして亡くなる方です。今の歳でいうと四十二歳ですか、それくらいな若さで亡くなるんですが、しかしすごい教育者でもあったんですね。この明教院僧鑑師をはじめ、安芸の慧雲師であるとか、あるいは崇廓師であるとか、石州岩見の国の実成院仰誓師といった非常にすぐれた学僧をたくさん育てられた。その中でも、この明教院僧鑑師と安芸の深諦院慧雲師、この二人が僧撰門下の双壁といわれたん

ですが、このあたりから、今申しましたように、浄土真宗のみ教えというものを対外的というよりも、対内的に内側で明らかにしようという動きが出てくるわけです。そういう教学的な営みに先鞭をつけて、これから後、浄土真宗の教えというものを味わっていく時の枠組みを決めていく、ということなされたのがこの明教院僧鑑師なんです。この僧鑑師のお弟子にです、やはり越中から出ます快楽院柔遠師という方がいらっしやる。それから、この入門書を見ると「薩州」とありますが、薩摩の国の出身で、名前は書いてありませんけれども、淨信院道隠という方が、やはり明教院のお弟子に出られます。今日もあそこで、僧鑑師の門弟の方々の名簿を見せていただきますと、いろいろなことがわかるのでございますけれども、その薩州は薩摩の国の出身、ご存じのように薩摩の国というのは、

当時念仏が禁制になっておつたんですね。殊に本願寺系の浄土真宗の教えというのは禁制になっておりまして、それを信じているということがわかれば、とんでもない拷問にかけられたり、あ

るいは場合によつたら死刑になったりするような大変恐ろしい国だったわけですね。その出身でございます。だから、「薩州」とだけ書いてあつて名前が書いてないんですね。しかも住



明教院僧侶法話

僧銘(註)本願寺派空華の祖。名は慶雲。字は子練、甘露室・空華庵、雪山と号した。越中・水橋の農家に生まれ、幼名を渡辺興三吉と称した。十一歳で上市・明光寺の靈澤師につき、二十一歳で善巧寺の法嗣。京都・学林にて僧模師の門人となり、のち自坊に空華庵を設けて学僧を教育。その門弟は全国三千人に及ぶといわれる。天明三年六十一歳で入寂。明教院と謚号せらる。

空華語録

第十七願は所行の法體なることは勿論争うべきことなし、その所行の法體がすぐに行者の能行になると云ふこと今家不共の妙釋なり。

行者の能行がそのまま所行の法體のなりをもちふ、此れ、於「所行處立」能行者他力全極なり。

終日能行すれども所行海をはなれず、行ずれどもく行に行の相なし、只是れ選擇本願の行をそのままあらはれてゆくなり。

— 本典一 一滴録より —



空華庵の焼印

所がこの浦山になっていきます。やはり世をしのぶ姿であつたんだろうと思うんですね。この道隱師と柔遠師という二人の学僧を、この明教院は育てていかれました。他にもたくさんいらっしゃるんですけどもね。

その快樂院柔遠師の系統がここ越中で栄えましたんで、「越中空華」と呼ぶのでございます。そして、道隱師は後に河内の国の明日香という所に参ります。河内の国に明日香があるんですよ。「あすか」というのは大和だけじゃないんですよ。大和の飛鳥は「遠つ飛鳥」というんです。河内の明日香は「近つ明日香」といいます。今の古市のあたりですね。あの古市に西法寺というお寺がございまして、そこへ入ります。この道隱の系統が「堺空華」といいます。「越中空華」と「堺空華」、そういう空華の二つの流れというものが明教院から出るわけでござい

ます。その越中空華の流れをくんだ方で、もとはやはり越中の生まれの方ですけれども、後に美濃の国、今の岐阜市のお寺に入寺された行照師という方がいらっしゃいます。後に勸学になります。この行照和上に小さい頃に入門した方で利井鮮明という方が出るんですね。その鮮明和上のひ孫さんにあたられる方がこちらにおいでになつてました隆弘先生です。若くしてお亡くなりになりましたけれどもね、これは越中空華の系統なんです。この鮮明和上の系統が行信教校として今も残つておるわけでございまして、私も行信教校で空華の流れをくましていただいている一人なんです。今でも残つておるわけですね。尚堺空華の方は、堺に性海師という人が出ます。この人が非常に有名でございまして、堺空華というふうになったんですが、この性海師のお弟子に、豊前の国中津、今

は福岡県になっておりますけれども、そこに松島善護師という方がありまして、この善護師の門下にずいぶんとたくさんの方々がまゐりました。明治から大正にかけて、龍谷大学の真宗学の教授の大部分は空華派が占めるというような形をとつたんですね。いわゆる空華派の全盛期を迎えるわけでございます。今でも空華派というのは脈々と生きてい



(続く)



太子会

4 / 11

初参式

4 / 23

今年は初まいり史上初めてのことでしたが、チューリップの咲き具合の関係で日を一週間繰り上げたため、ご迷惑をおかけしました。それでも八人の赤ちゃんたちが花の中で仏様にご挨拶。お寺の学校の生徒達や寿楽苑の方々等みんなから祝福されました。今年のお参り最高年齢は百五歳。みんな生まれてよかったね。

本波凌、橘雅子、松木あすか、神子周太郎、沢田雅斗、沢田海斗、沢田真歩、野畑遊梨（敬称略）

仏婦連盟教区総会

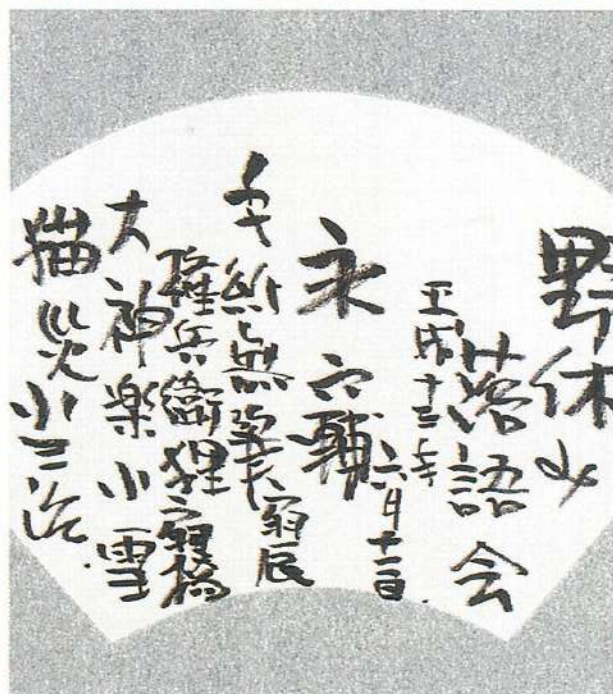
4 / 26

専精舎と本山参拝

5 / 21 ~ 23

第百六回専精舎夏講に今年もご縁をいただきました。一日目は宇治の平等院を見学。専精舎は、初日に参拝。





梯實圓和上の本講、騰瑞夢先生の副講の後、論題「元高化風」で会説が行われ、午後は科外講演をお聴聞。最終日は二本山参拝、大谷本願の明教院さまのお墓参りをしました。

「龍大ニ七会」
ご参拝
6/1

土井了宗氏のご案内で、中西智海氏、井上博厚氏ら龍大卒業生八十二人がお立ち下さいました。

野休み落語会 6/12
第二十四回目の落語会。太神樂の小雪さんの演技にため息がもれました。小三治さんの「猫の災難」は、圧巻。福井の千福寺さんご一行や奈良からお越しの方もあつて、今年もようこそようこそその落語会でした。

「龍大宗教教育部 同窓会」ご参拝
6/13

利井明弘氏のご一行がお立寄り。千客万来の六月でした。



祝



山口県養專寺
元 淨健爾さん

寺報「善巧」毎月ご惠送
頂いてありがとうございます。
遠く離れていても活躍の様子がよくわかります。
次回は百号とのことおめで
とうございます。前任様のご
意志が脈々と続いて大変
尊く感ぜられます。よろこ
んでおられることでしょう。
ささやかですが、お祝いの
ころざし同封しておさま
す故、記念行事費用の一部
にでも充当頂ければ幸いです。



柳家小三治さん



内山常照寺坊主
樋口治美さん

あつたかい寺報
十七夜お経会にご縁をい
ただき、勉強させていただ
いています。九時三十三分
の電車に乗る為二十五分
になるとお尻をモゾモゾさ
せる私を目ざとく見つけて、
高務哲量先生は「送ります
よ。」恐縮する私を乗せて
先生のバジエロは雪の中を
つつ走ります。

『寺報善巧』はそんなお
経会と同じ雰囲気を持った
あつたかい寺報。お寺へ足
を運べない人も、寺報を読
む時、お寺の空気に触れ、
仏様の慈愛に包まれること
ができるでしょう。



元 浦山総代
野島重一さん

先日善巧寺で、行信教校
創設者の常見寺利井鮮明さ
まの法語集を読みました。が、
「道理理屈は知らずともよ
い」という見出しで、十円
札はどんな印を押し、どん

なことが書いてあるか、そ
んなことは知らなくとも十
円札は十円で通用する。

六字名号は、如何なる訳
のものか、如何にして往生
するのか、そんなことは知
らなくともよい。唯、信ず
る一つで往生させてもらう
のである、とありました。
喜怒哀楽の慌ただしい世
の中で、残り少ない人生を
生かされて生きている私で
ありますが、これからもご
聴聞につとめたいと思つて
おります。



浦山総代
八木秀雄さん

二十五年前初めて若はん
(隆弘師)に逢った。

それからお寺に顔を出す
ようになった。仏さんの事、
真宗の事、何も知らない者
が今やつと「南無阿弥陀仏」
と声を出して言えるように
なった。後何年でお浄土へ
行けるかなあ。今私は寺報
を配るお手伝いをしていま
す。少しでも遅かったら電
話がかかってくる、皆さん

が待つているんだなあと痛
感する。早く配ること、私
に出来るのはそのくらいで
す。頑張ってください。



仏婦会長
沢田みさをさん

「善巧」が百回を迎えま
すことは年数にして二十五
年はかかっている計算にな
ります。

亡くなられた「ごえはん」
「わかはん」そして現在の
お寺の方々はそれぞれに特
色があり、楽しい思い
出がわいてきます。

講師先生の短いお話、嬉
しいニュース、楽しい行事、
家まわりの報恩講。月々のお
講で、門徒さんのおられ
る地区がわかります。お寺
の大きな法事もお寺と裏方
との支えで長い年月守られ
てきたことがよくわかりま
す。

お寺と門徒さんとの心の
結びつきで、小さい前進を
たゆみなく続けられて今日
までに至ったことに、敬意
と感謝を表します。



お経会
山本憲司さん

一心のこころ

雪山隆弘さんが人々の心
に残されたものは沢山あり
ますが、その中でも寺報は
新聞記者を経験されただけ
に魂がこもっている気がし
ます。創刊号から五十七号
まで手がけられたという寺
報「善巧」は、その後も教
えを受けられた方々の「一
心」の手で引き継がれ、記
念すべき百号になると聞き、
隆弘さんの思いが変わりな
く今もそこに生き続けてい
ることに感動いたします。
人の身は一代でも「立派な
考えや行い」は末代続くも
のです。教えに感動し
「一心」に続けて伝える人
が居る限り、その人は生き
続けているように思います。
親鸞聖人、蓮如上人がそう
であるように。
：先ずは百号節目の発刊
を祝い、末永くお寺の歴史
と共にいつまでも続刊され
ますように。



浦山新総代
鬼原六義さん

第一号が昭和五十二年一月、それから二十五年、四半世紀になり、途中編集者がやむを得ない事情で交替など、道程は必ずしも平穩では無かったと思われまゝ。その間お寺の出来事、各講師の法話の紹介等、お参り出来ない人達との懸橋となっています。

「継続は力なり」と言われます。世の文化、伝統も又然りです。どうか地方の名刹として知られる善巧寺の発展と仏教の振興の柱として百五十号二百号に向けて一層研鑽頂くよう念じます。



法輪寺若院
高島康彦さん

近頃の世相を短く云い表すと「軽薄短小」の時代であると思われています。軽く希薄に、短くコンパクトに、現代人の乾いた心そのままを表す言葉に思えます。しかし、この様な現代に、

「重く濃く長く大きく」と、逆行する活動を行っているのがお寺です。そしてこの活動を皆さんに知って貰うための寺報が今回で百号、すごいことです。皆さんに少なくとも百回は、お寺から呼びかけている勘定です。これを機にまだ一回もお寺へ来たことのない方がおられたならば、是非足を運んでいただき、世間の乾いた風とは違う爽やかな風を吸って貰いたいと思います。



雪ん子シニア
中麻由子さん

百号おめでとうございませう。小学校一年生の時からお寺に通つてもう十六年。お寺のあちこちに思い出がいっぱいで、ここで学んだ多くのことが私の宝物になっています。この出会いがなかったらきっと今の私はありません。私にとって善巧寺はそれくらい大切な心の拠り所です。今の子供達にとってもそうなってくれるといいなと願っています。



お経会
大藪節子さん

毎日忙しい忙しいで、自分を反省することなしの私にとつて「寺報善巧」が届いた時は、砂漠を歩いていてオアシスに出会ったような安らぎが得られます。

雪ん子鳥取公演

先日「いのちみつめて20」におきましては、富山より遠く鳥取まで来演してください、誠にありがとうございます。御礼申し上げます。お蔭様をもちまして、とても有意義な会をもつことが出来ました。会場内が暖かい雰囲気、包まれるような雪ん子たちの姿を見て、心響かれ涙された方がおられたそうです。また、小学生が演じているということ、同世代の子供達にとつて、とてもいい刺激になりました。そして、雪山先生のご講演を聞かれ、自分の子育ての



間違いに気付かれ、心から涙された方もおられたそうです。大人も子供もそれぞれがみんな主役となつて、多くの気付きをいただいた会になりました。このように多くの気付きを私達に与えてくださった、雪山先生と雪ん子劇団の皆様には、心より感謝致しております。この度のご縁を大切に、スタッフ一同益々精進いたします所存でございます。今後「いのちみつめて」は、共にいのちをみつめ、共に歩んでいく空間を作りたいと思っております。善きご縁、本当に有難うございました。スタッフ一同

梅雨晴れや
青き葡萄の
風に揺れ
喜子

寺 ごよみ

八月

一日 石田・生地お講
八日 雪ん子劇団広島廿

一三日 青年盆会

一四日 盆踊り練習会

一五日 こども盆踊り

一六日 盆会

一七日 音沢本山助成会

二〇日

雪ん子劇団合宿

二五日 雪ん子劇団夏の定期野外公演

寺 ごよみ

九月

八日 仏教婦人会連盟北

陸中部大会高岡

一七日 お経会釈隆弘祥月

一二日 黒西組僧侶研修会

一三日

連研修了式

二七日 雪ん子セレネ公演

三〇日

ご寄進



七条袈裟一大藪トキエさん



献灯献花道具一式—細川ますゑさん
(野島はつえさん姉)



門徒法事用水引—朝倉みさをさん



聴聞用椅子—西中庄作さん

永代祠堂会

七月十六、十九日

十六日十一時 お講

一時 仏教婦人会

十七日 一時 寺族・総代物故者

追弔法要

七時半 お初夜

十八日 一時 戦没者追弔法要

十九日 一時 内陣法名法要



ご講師

高務哲量先生

青年盆会

八月十三日午後六時半
青少年がお寺で過ごす時間
間はえ難いひとときです。

こども盆踊り

八月十五日午後六時半
ご家族おそろいでどうぞ。
練習会は十四日午後七時半

盆会

八月十六日午前十一時
お盆まいりはこの時間に。



よろしく

照行寺若院神子巧さん夫妻
の長男、神子周太郎くん
です。誰にでもにっこりの愛
敬よしです。よろしくね！

仏教婦人会

七月十六日仏婦お参り日
この一年間に二十人のお
仲間がお浄土に還られまし
た。ありし日を偲んで、こ
の私がお聴聞のご縁をいた
だきましよう。

●会費未納の方至急お納め
ください。二年分千円です。

●総会十二月一日一時
予定に入れておいて下さ
い。

合 掌

五十二年一月一日、

“如来のメッセーじをあなたに”と、文学者の前々住職俊之、ジャーナリストの前住職隆弘のコンビで誕生した寺報「善巧」が百号を迎えました。二十四年余、休まず発行することができましたのも、門信徒の皆様のおかげです。ありがとうございます。これからもお寺の熱い心をあなたに送ります。

勤式指導所で勉強中の住職から手紙が届きました。

アミダさま

僕が僕であることを認めてくれてありがとう
そのままでいい、といわれて

このままではいけない、
と思うようになった

俊隆

